



令和7年度岩手医科大学卒業式が挙行されました 広報委員長 黒瀬 雅之



上段右：小林歯学部長から学位記を受け取る熱海さつきさん、中段左：伊藤大成さん、中段右：坂本亜弥さん、下段左：小笠原学長より博士課程を修了し、学位記を授与される松尾小百合さん、下段右：歯学部を代表して祝辞を述べる石田まりあさん

令和8年3月6日（金）、トーサイクラシックホール岩手（岩手県民会館）大ホールにおいて、令和7年度岩手医科大学卒業式が厳かに執り行われました。当日は、岩手の厳しい冬が終わりを告げるような穏やかな晴天に恵まれ、春の訪れを感じさせる佳き日となりました。まだ桜の蕾は固い季節ではありますが、会場内は卒業生の門出を祝う温かな熱気に包まれました。

本年度の歯学部においては、計46名の卒業生が晴れの日を迎え、歯科医師としての第一歩を踏み出しました。また、大学院歯学研究科からは計10名に対して学位記が授与され、長年の研究成果が結実する瞬間となりました。

卒業生ならびに修了生の皆様、そしてご家族の皆様、この度は誠にありがとうございます。皆様が本学で培った知識と経験を糧に、医療の現場や研究の舞台で大きく飛躍されることを、教職員一同、心より願っております。

## 卒業に寄せて

第56期の46名皆さん、ご卒業誠にありがとうございます。これまでの学生生活の中で、努力を重ね、仲間と支え合いながら歩んでこられた日々、心より敬意を表します。

歯科医療は今、超高齢社会の進展や医療の高度化の中で、その役割を大きく広げています。これから歯科医師として新たな一步を踏み出す皆さんに、「進取果敢」という言葉を贈ります。自ら進んで新しいことに挑み、困難を恐れずに道を切り拓いていく。その姿勢が、これからの時代を生きる歯科医師に求められています。歯科医師としての成長に近道はありません。一人ひとりが患者さんと真摯に向き合い、経験を積み重ねていく中で、少しずつ自分の道が形づくられていきます。変化を前向きに受け止めながら、自分らしい歩みを大切にしてください。

迷いや不安を感じたときには、どうか母校で過ごした日々を思い出してください。私たち岩手医科大学と同窓生は、いつでも皆さんを応援しています。お世話になった先生方や仲間、先輩にも、どうぞ気軽に相談してみてください。きっと皆さんの支えとなることでしょう。皆さんのこれからの歩みが実り多いものとなることを心より願い、新たな門出を温かく祝福いたします。



歯学部長  
小林 琢也 教授

56期の皆さん、ご卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。6年間担任として過ごしてきましたので、皆さんの勉学、技術の習得のための努力と歯科医師になることへの意気込みを持続させてきたことを身近にみてきました。心から敬意を表しますし、人間性の成長においても実感しています。今後、多くの社会貢献の場で活躍をしていく皆さんに「精力善用自他共栄」という言葉を贈りたいと思います。これは嘉納治五郎が提唱した柔道の基本理念ですが、精力善用とは心身の技（豊かな人間性と医療人としての技術）を最大限に活かすこと、自他共栄とは敬いの気持ちを持ち信頼し助け合うことで自分も社会も共に反映すると理解することができます。私は皆さんが新たな医療技術の習得だけでなく、広くアンテナを張りさまざまな事柄に興味を持って努力を惜しまず、他者への寛容の気持ちを持ち、自分が困難に直面した際には経験豊かな周囲の諸先輩方に相談をしながら向上心を持って進んで行ける素養を本学在学中に十分に醸成されたと信じています。これからもさらなる人生の目標に向かって歩み続けてください。門出を祝福すると共にこれからも皆さんを応援しています。



56期生担任  
藤原 尚樹 教授

56期生の皆さん。卒業おめでとうございます。諸君の担任だったのは5年生からの2年間だけでしたが、やはり受け持った学年というのは格別です。優等生だった君も、世話の焼けた君も、みな思い出深く私の教員人生の最後の2年間を彩ってくれました。

シェイクスピアの作品、ハムレットに“To be or not to be that is the question”という有名なセリフがあります。「生か死か、それが問題だ」（1915年、久米正雄）というのがよく知られた訳ですが、実は多くの人が様々に翻訳しています。そのなかに「このままでいいのかわからないのか、それが問題だ」（1973年、小田島雄志）というのがあります。つまり“be”は存在であり、現状であり、もっといえは今の自分を肯定することをも意味します。今の自分を肯定することは幸せなことです。でも若い諸君はハムレットのように自問自答してください。安寧から逸脱して、新しいことに挑戦することは若者の特権ですから。

これからの諸君の人生にはわくわくするような可能性が満ちています。それらを少しずつリアルにしていくことを楽しんでいってください。



56期生担任  
岸 光男 教授

# 卒業生の声

## 大学生活を終えて 坂本 亜弥さん

私が大学生活を送る中で学んだことは、周りの方々のご支援があって初めて勉強させていただけるということです。入学して初めころは気づく余裕がありませんでしたが、6年間を通して成長する中で、家族、友人、先生方、患者様方、職員の方々など、本当にたくさんの方々による支えがあった現在の環境であると身に染みて感じるようになりました。そう思っただけでも、なかなか勉強に身が入らないこともありましたが、そんな自分に嫌気がさすことがたくさんありましたが、感謝の気持ちを忘れずに生活していけば、最終的には勉強も自ずと上手くいきました。これからも周囲の方々への感謝を忘れずに、誠実な医療者を目指して努力したいと思います。



## 卒業を迎えて 杉山 莉佳子さん



6年間で最も印象に残っている出来事は、仲間と共に支え合い取り組んだ臨床実習です。実際に患者さんと向き合うことで、歯科医師としての責任を強く実感しました。悩んだ時も励まし合える友人の存在が大きな支えでした。夏にはさんさ祭りが開催され、レポート提出後に友人たちと屋台のご飯を囲んだ時間は、かけがえのない思い出です。まさに、遊びと勉学に負われながら過ごした6年間でした。6年という年月に、入学当初は果てしないものと感じていましたが、今となっては瞬く間に過ぎ去っていったように思います。私が一人の歯科医師として、社会に羽ばたいていくために支えてくださった家族や先生方、大学関係の全ての方に感謝申し上げます。

## 感謝 谷口 浩介さん

「寝たきりの方が入れ歯を入れることで庭掃除ができるまで回復し最期を迎える」「永久歯に続く3番目の歯の存在」などの話から、歯科医療が現実困っている人を幅広く支える力を持つことを知りました。さらに、先生方が患者さんから感謝の言葉を受け取られる姿を目にし、その責任の重さを実感しました。こうした学びを得られたのは、基礎・臨床の先生方、教務や清掃の方々、家族など多くの支えがあったからだと感じています。5年次にクラスメイトと一緒に、「2024年度いわて銀河ウルトラマラソン（100km）」を駅伝で完走した経験も、支え合うことの大切さに気付く機会となりました。感謝を胸に、人に寄り添える医療人として歩んでいきます。



## 七転び八起きの6年間 吉田 明弘さん



56期生の吉田明弘といいます。私は実家が歯科医院という漠然とした理由だけで歯学部に入りました。低学年の頃は基礎医学が中心となり入学時に抱いていた歯学部の勉強とあまりにもかけ離れていたため学業についていけなかった日々でした。しかし、5年生で外来に出ると今まで学んだことで患者さんのお役に立つことができるという感覚に感動を覚えました。試験で躓くことも多かったのですが、困った際は先生方が親身になって相談に乗ってくださいました。

また、どんな時も家族が温かく応援してくれました。こうして卒業を迎えられるのも支えてくださった全ての方々のおかげです。ありがとうございました。

この6年に渡る大学生活を振り返りますと、講義や実習、そして国家試験に向けた勉学の日々は決して平坦な道のりではありませんでした。しかしながら、仲間と励まし合い努力を重ねた時間は生涯におけるかけがえのない財産となりました。ここで得た知識と経験、そして本学の建学の精神である「医療人たる前に誠の人間たれ」を胸に刻み、患者様に寄り添える医療人となれるよう、日々研鑽を重ねてまいります。これまで温かくご指導くださいました先生方、どんな時も支え続けてくれた家族に心より感謝申し上げます。

結びに、本学の益々のご発展と、先生方ならびに卒業生、そのご家族の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げ、卒業生の言葉といたします。



## 秋田大学医学部附属病院教授就任のご挨拶

秋田大学医学部附属病院教授 歯科口腔外科 教授 高野 裕史

この度、令和7年11月1日付で秋田大学医学部附属病院教授（歯科口腔外科）を拝命いたしました、岩手医科大学歯学部23期生の高野裕史と申します。

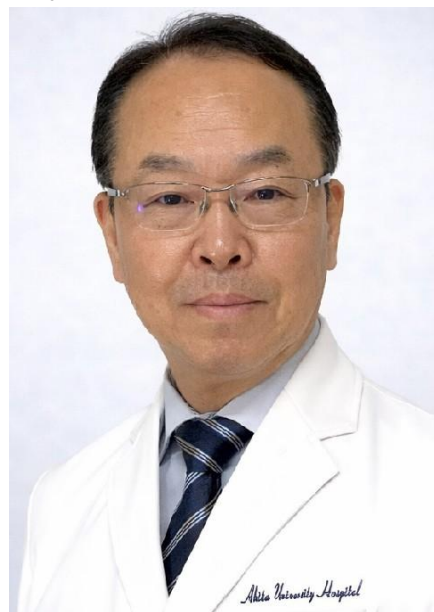
私は群馬県館林市で生まれ育ち、群馬県立太田高等学校を卒業後、1987年に岩手医科大学歯学部へ入学いたしました。大学入学後は軟式庭球部に所属し、毎年夏には真っ黒に日焼けしておりました。かつて全国的にも名を馳せた多くの先輩方からの熱心なご指導のおかげで、1991年には全歯体で団体優勝を果たすことができたことは、大学時代の大切な思い出の一つです。

大学卒業後は東北大学歯学部口腔外科学第二講座に入局し、研修医として2年間勤務した後、秋田大学医学部歯科口腔外科にて2年間、口腔外科診療の研鑽を積みました。1997年からは大阪大学医学部整形外科学講座において、慢性関節リウマチにおける骨髄病態の解明に関する研究に従事し、ヒト破骨細胞誘導系を確立するとともに、破骨細胞を中心とした骨・関節破壊機序の解析に取り組みました。2001年からは九州歯科大学形態機能再建学分野にて、さらなる研究および臨床の研鑽を積み、2006年より秋田大学医学部歯科口腔外科に再度赴任いたしました。その後も顎関節症や薬剤関連顎骨壊死の病態解明を中心とした骨代謝研究を継続し、近年ではがん患者の口腔機能評価から新規バイオマーカーの解明に関する研究を行っております。

秋田大学医学部歯科口腔外科は、1971年の秋田大学医学部附属病院設置以来、秋田県における歯科口腔外科疾患の三次医療機関として地域医療の中核を担ってまいりました。顎口腔領域の外傷・炎症、口腔がんを含む腫瘍および嚢胞、顎関節疾患、口唇口蓋裂、顎変形症、埋伏智歯などの難抜歯、さらには歯科インプラント治療に至るまで、幅広い分野で専門的医療を提供しております。近年では、顎骨再建後の広範囲顎骨支持型装置を用いた顎口腔機能の回復をはじめ、全身疾患の治療に影響を及ぼす口腔疾患への対応、さらには全身疾患に関連する口腔症状の発見・治療・口腔ケア指導を通じたQOL向上への支援にも積極的に取り組んでおります。

今後も、臨床・研究・教育を三本柱として口腔外科学および口腔外科診療の発展に尽力するとともに、地域医療の要として医歯薬連携を推進し、医療における歯科および口腔外科の役割を一層高め、社会に貢献していく所存でございます。また、岩手医科大学歯学部ならびに同窓会のさらなる発展に対し、隣県より微力ながらご支援申し上げます。

最後に、皆様の益々のご健勝とご活躍を祈念いたしますとともに、今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお祈り申し上げます。



# 県立久慈病院にて「障害者への全身麻酔下歯科治療」が開始

口腔顎顔面再建学講座 口腔外科学分野 教授 山田 浩之

2025年12月、県立久慈病院が県北・沿岸エリア初となる障害者への全身麻酔下歯科治療を開始しました。本学歯学部から派遣された歯科医師が診療を担うことで、遠方への通院負担を解消し、住み慣れた地域で専門的治療を受けられる体制が整いました。本学は今後も地域と連携し、質の高い歯科医療の提供に貢献してまいります。

## ディプロマサプリメント活用していますか

副歯学部長 岸 光男

岩手医科大学歯学部では令和3年度から、卒業生にディプロマサプリメントをお渡ししています。前回の歯学部だよりでお知らせしたように、歯学部では卒業生が備えるべき資質として、知識だけでなく態度や技能を含む9項目のディプロマ・ポリシーを掲げています。ディプロマサプリメントは、その達成状況を可視化するための資料です。

卒業後1年目には全員が臨床研修に進みますが、協力型施設の指導歯科医師に「研修歯科医に最も必要な能力」を尋ねたところ、最も多かった回答はコミュニケーション能力でした。これは知識だけでは身につかず、態度と技能にまたがる重要な力です。

ディプロマサプリメントには、6年次の学力試験だけでなく、臨床実習後の技能試験、臨床実地試験、4学部合同セミナーの評価など、卒前に行われた多面的な評価が記載されています。これらを臨床研修指導医と共有することで、自分の強みと課題を明確にし、より効果的な研修につなげることができます。

できないことを共有するのは恥ではありません。課題を知ることこそ、成長の第一歩です。ぜひディプロマサプリメントを活用し、自らの学びを次のステージへつなげてください。

## 退職教授のご挨拶

私の出身は東京医科歯科大学（現、東京科学大学）ですが、大学教員としての経験は岩手医科大学が初めてでした。ですから、大学人としてのすべては岩手で教わりました。岩手に来て最初に感じたのは、ヒトの温かさでした。例えば、机の上にメガネが置いてあったとして、東京だったら「誰だ、こんなところにメガネほったらかしにってる奴は」と、誰かを責めるような口調になりそうなところを岩手の方は「あらま、こんなところにメガネさ置がさってる」と歌うように表現します。まるで、神様がそっとそれを置いたかのように、誰のせいにもしないのです。なんと優しい言葉だろうと感心したものでした。もしかすると周りの人たちのそんな優しさに甘えて無茶なこともしてきたかもしれません。

1997年から、29年余りを岩手医大でお世話になりました。私が大学在任中に岩手と岩手医大に貢献できたことは、たぶん私が受け取ったことに比べて本当に微々たるものだと思います。しかし、人生の中で最も充実した時期を岩手の地で過ごせたこと、そして出会った多くの方々から感謝したいと思います。皆さまのご健勝と、岩手医科大学のさらなる発展をお祈りしています。

口腔医学講座 予防歯科学分野  
教授 岸 光男



### 編集後記：編集委員長 熊谷 美保

ご卒業おめでとうございます。講義や実習、仲間との交流の中で得た経験は、かけがえのない財産としてこれからの人生に生きていくことと思います。

社会へと歩み出すこれからの日々には、新たな出会いや多くの可能性が待っています。皆さんがそれぞれの場所で力を発揮し、社会の中でご活躍されることを心より期待しています。母校はこれからも皆さんを見守り、応援し続けています。皆さんの前途が希望に満ちたものとなることを心からお祈り申し上げます。